

根岸友山・武香親子の業績

大里歴史研究会会長 岡田辰男

熊谷次郎直実の流れをくむ青山の根岸家は中世、比企郡根岸村（嵐山町）の豪族だったが、豊臣秀吉の小田原城征伐（1590）に北条方の松山城守備軍に在って敗戦、甲山村・・・明治期青山と改名・・・に土着したという。根岸家は江戸時代中期以降質屋、江戸との交易、酒造などで蓄財して有数の豪農となり、村名主を世襲している。

根岸友山（1809～1890）

文政七年（1824）十六歳でその十一代目当主となった友山・・・信輔、伴七を襲名、友山は号・・・家業を番頭に任せ、名主としてまた社会事業としての活動を始める。

①治水事業。当地は荒川右岸の低湿地で洪水被害が多く、幕府や村々は河川、堤防改修を行ってきたが、天明三年、噴火した浅間山の降灰が河床に積もり、また、異常気象による連年の大雨で堤防が決壊して洪水が頻発、改修も儘ならず農民は窮乏した。たまたま治水を担当する上吉見二十三ヶ村組合惣代になった友山は、事態打開のため幕府に陳情を繰り返し、ようやく天保四年川底の浚渫、堤防補強、和田吉野川合流点の延伸と水門構築など大規模な御普請が行われて暫く洪水を免れることができ、人々は「地理直し御普請」と呼び讃えた。しかし、天保十年にはまたまた増水により堤防が破損し、その修復をめぐる組合内の争いが騒動となり、友山はその責任を問われて天保十二年江戸四方追放の刑に処され、二十年に及ぶ他国暮らしを余儀なくされた。当時二十三歳の友山にとって痛恨極まりない出来事だった。

②青少年教育を始める。若く当主となり、勉学を断念せざるを得なかった友山の向学心はやがて”共に学ぶ”ことに凝集し、天保四～五年の頃青年塾「三余堂」を開設した。三余とは、時の余り、日の余り、月の余り、つまり余暇を勉学に充てようとのことで、教室は自宅の客間を充て、漢学のほか当時としては珍しく博学、数学、医薬などの講義を取り入れ、講師は同門の先輩で「江戸繁盛記」の寺門静軒、のち忍藩儒となる芳川波山など江戸の学者、藩士などを招いた。また心身共に鍛錬をと剣術道場「振武所」を併設した。指南は友山の恩師志賀村（嵐山町町）の水野清吾（甲源一刀流）という。然しながら数年にして友山の受刑、転居により両者とも閉講となる。

友山の正式な宥免は安政六年になるが、安政元年頃には帰宅を許されていて、三余堂も振武所も再開された。当初は縁あって幕府学問所昌平藁の地方藩出身学生数人が交互に来村して講義し、剣道師範ともなった。その陣容は後に勤皇の

志士、維新の元勳となる錚々たる人たちであった。寺門静軒も度々来訪して教え、また国学者安藤野雁、算学者松枝誠斎を招聘、振武所は江戸の大家千葉周作の門弟を招くなど充実した教育を行い、幕末に閉講するまで十五年間、送り出した多数の師弟が維新後の地方政界、教育界、産業界で活躍した。

③尊王の志士となる。蟄居先での上州新田勤王党の感化か、安政の不平等な通商条約に日本の将来を憂い、倒幕、尊皇攘夷者となり長州藩と江戸騒乱のとき婦女子を匿う密約、勤王の志士と交流し私財を投じての援助、文久二年には自身も知友、子弟など三十人を引き連れて朝廷警護の浪士隊に加わり上京、また薩摩藩の幕府転覆計画に加わるなど活躍した。

④村民保健のために。当時の農民は貧困、過労などにより病弱者が多く、短命のため保健を計ろうと三余堂の塾生を江戸・長崎に派遣して西洋医学を学ばせ、嘉永五年（1851）根岸家の猶子として村内に医院を開業した。また博学を好んだ友山は長かった蟄居の間漢方薬の研究に励み、下剤、皮膚病や火傷薬、目薬などの新薬を造り、漢方薬の製法、効能などの解説書をものしている。特に目薬は好評で第2次大戦後新薬事法の制定で製造中止するまで100年も愛用された。



根岸武香（1839～1902）

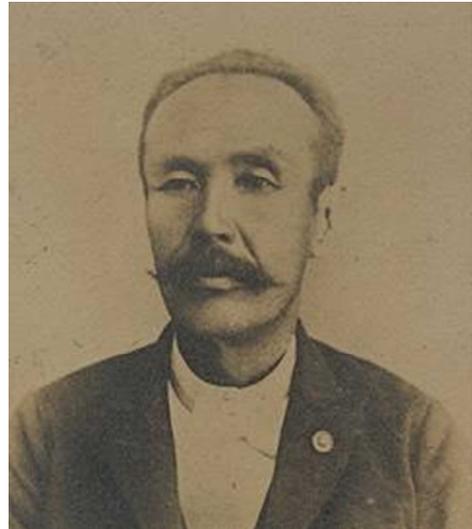
友山の子、伴七を襲名、櫃園と号す。父の受刑により天保十二年三歳で当主、十一歳で甲山村名主となる。

①政治家として。維新当初目まぐるしく変わる中であって戸長、副戸長など歴任、とくに明治五年学制施行に伴い熊谷県学区取締役となり青山小学校を始め七大大区内数校の建設、運営に携わり、多額の私財を提供して学制の速やかな浸透を計った。

明治十二年県議会が開設されるや議員に選ばれ初代副議長、翌十三年には議長となり、議員を継承して明治二十三年には再度議長となり県政に尽くす。また明治二十二年町村合併で誕生した吉見村議会議員となる。さらに明治二十七年貴族院議員となり、折しも日清戦争の最中で広島大本営に出仕するなど村、県、国政に携わり幾多の業績を挙げる。

②産業振興に寄与。明治維新後自由な活動が可能となるを機会に備荒のため松の植林、林野の開墾、輸出向け茶の生産、養蚕普及に愛娘を富岡製糸所に学ばせるなど新規事業の奨励、米麦作の改良による農業経営の安定を図った。

③文化振興に寄与。開墾の折出土した埴輪、古器物などに興味を持った武香は明治十年里人の噂する黒岩村地内の横穴を十六個も発掘して（周辺に未発掘多数）外人シーボルト、モースの来訪を受け一躍有名となり、明治十七年日本人類学会会員となる。明治二十年東京帝大学生坪井正五郎の求めに里人と吉見百穴の発掘を始めたが途中帝大に委譲、237個を発掘して学会注目の的となる。（現在国の指定史跡）埴輪、古器物に次いで古銭、古印、古文書などの収集を行い、日本古印譜、皇朝泉貨志など学術的な著作をしている。これら資料は武香死後、帝室博物館、国立図書館、東京帝大などに寄付、寄託され、貴重な学術資料となっている。また、明治十七年には幕末、幕府が二十年の歳月を費やし調査したが未完の武蔵風土記の原稿を借り受け「新編武蔵風土記稿」八十冊を刊行したが、この書は今現代文に翻訳されて学究のみか一般の人々にも愛読されている。



（熊谷市公連だより 第14号 平成24年より）